国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

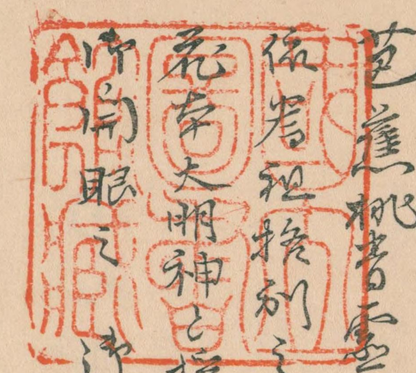
ガラス使用

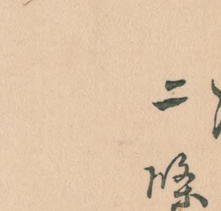
八六三—一六〇

泥

二條殿江　依賀之狂書記

花や鳥の詠





菟道稚郎雲神宮十四首　百五十句

依賀和歌別当

花本大明神七首　依賀

作者眼元　沖能信連歌法眼

白妙と磐ゝもそめぬ雪の朝

二條殿

春とうち告る鳥の音

狂歌

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

こゑむしの
きゝやうまつ
まつ
こゑ女
庵

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

祖翁真跡之分
箸由汁多を
さゝ浦くの事
古池や蛙
先きの
山里は万歳
叶翁を第一
一里は
野ざらし
涼しさや
明ぬ千二十七歳と
巧ん海市佐渡ニ
孟ニ泥菜蒔

一軸

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

松葉よなみよ
すゝや秡の緒手
赤〳〵と日ハ
二日もめり
雪菊や小糖の
やうて志ぬ霧しき
名月秋立
篇葉新の栄
ものゝ名は屠蘇とし
門人名前録
洲浴恩書
反古切屏風
うろ古

一巻　一双　一巻　日　日　日　日　日　日　日　日　日　日

水鶏笛
東藤西藤〻文
末期〻文
西兄発
嵯峨日記

祖翁古郷塚之図

碑面

芭蕉桃青法師

玄峰庵嵐雪之筆

一巻

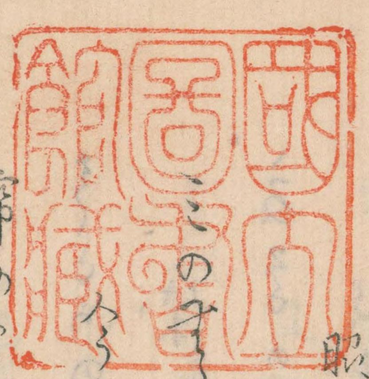
国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

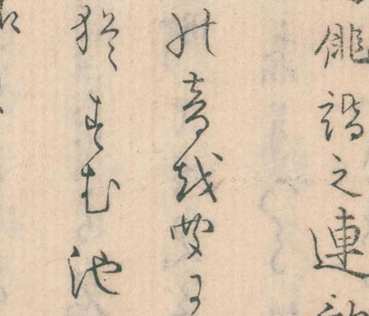
国立国会図書館　タイトル『声の栞』 請求記号 863-160

ガラス使用

天保壬寅八月十二日於古々塚
芭蕉翁百七十遠忌追福興行



歌仙 起龍話之連歌



国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

行ゐへやら団ゐいそれ子松の風　磯山
　紫苑の原も招くゝあるゝ　求古
よいつゝを奥の心家へ栄ゝり　杜鵑
　き井海ゝをゝ残ゝむ　金波
ゝくゝめのゐゝゝゝる名古屋　賀岡
　紫を町てもえゝる傘　魯月
ゝゝゝの茶店へゝる格ゐゝれ　希声
　枝きりなゝきゝゝくゝきし蝉　渓篁
こゝな書ゝゝゝ経のゝゝゝなる　芦岸
　ゝゝれらゝゝなゐゝの戸栖　学子

上ノ一

桃接ゐめつゐ市子あきの月　梅價
　圀ゝゝいうゝゝ己者　木容
特衣の独をちゝれるゐゝめく　桃渓
又一刻舘えゝ業ふき　桃不
ゝしゝゝ花を地をゝゝ風たゝ　其容
　行なゝゝみゝゝを架和合妻る　学石
ちゝゝゝはゐゝゐゐ社ゝん像　馬文
　吟いゝゝうゝかゝゝゝる箒　士遡
梯やい花ゐ檎の割未を残ゝゝ　桃下
　注連引ゐいすゝ接をひつゝ　一東

国立国会図書館　タイトル『声の栞』 請求記号 863-160
ガラス使用

お眠ふい像のやうな 武吉楼 凸凹

から入梅なれとりつくる 九畝

先行の団代之介欲い伐きりあ 若阜

咽のわるくなりてそてをおき 杏翁

かくされさ文箱七そ 寿圭

そあれ〳〵蚊をうつ水鉢 政年

されといふ菜の姿もつうめなあ 佛美

遊びのはれいおらめ夜倉 酌水

くの七そそくおらまきそ蚕 啓年

やくそく多き仇のこうもを 卧雪

そあ入のうちういやこうる 月石

塔の九輪のようえゆるまと 露洲

牛おとく牛我立合之通まい 秋村

被の人ようふく肝ける 風史

その法乃そそ彩りきそ 乙梅

等半时之なりし年の尾 里柏

腰板の末地のおそある番その傍 物亨

うまさうなのむる梅枝のあ 春領

涼〳〵さ月の木ろ路おをそて 雅尊

於来のさともきうめ安立り 双竜

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

先揉之兎のきみをおろし　　鳳尾
二年猿戸よりうそうなる家　　如風
舁る雪招引の花衣枝こうみ　　梅通
雪しらさる之椿うむす　　子学
姑春もさらさる仕舞ふちち甫　　春坡
神るる雪ふたり麿也　　正未
小軍このるる人夫の掃庭ろ　　瓢石
花火之臭を投めこ饒く　　玉脇
猿雪之恵からあをぬいまう　　無風
琴弥てなるさめらふ他しさ　　九起

漱茶之も流れるの吉蕊者　　月坡
ちきれ茶碗銭落之衆る　　芦洲
庭草のふりあとるれ新あらし　　照市
特のそへいらりぬ野うられ　　琴亭
にをうあまいて日庭の岩をしみ　　風竹
名ばしも招くる亦方　　ふ二竹
ふるう月之小室き渉茶椀　　雲童
三寸之も雪をる稽の大ふさ　　乙彩
華山へ庭こうちをるたうをる　　梅枝
ぬり枝はかいふ彩をえらる　　永年

国立国会図書館　タイトル『声の栞』 請求記号 863-160
ガラス使用

丁子風呂あまた入れと香も添れ　　霞舟
　来朝うしてても一念てをや　　等言
とうまつ口吉を伝母のうとうと　　暮雨
　馬も馬らめ酒飲寺もら　　鳥乙
話てこそ老おとてを招の苔　　芝丈
西汐と逢ふるなる雑　　宇弘
　乾布の仕え連るやな　　小雅
花ちる札うう　　抹雪
　まうしうを人丸　　信之

こへる庵もりかへつて
二三日飽の浦の潮
まる雪も時雨も粉綾もら
ふとと称らまあの如り
ふとても奉公うしうを
枝折なれと自然なる宿
つきてて祝のをを一すとをひ
おうそうの待のなそそ
さらしと砂のあるる瀬戸やま
至招よりうう

菜をもつて礼に舞ひ戯れはせぬ　軒賢
持参の銭取つて辻の雪　文
焉うう考えもつかぬ石　千石
疱瘡神を送りやつて　少一
両名と用いる銭つかい　旦角
露のなうれる庭の野菜　多轍
さら髪の薄きめつき　毛抱
からを振ても九つのからまる　松歩
笑ふまいとすれど仕内まず　草也
うつそうと通す法師の手持　梅井

僧衒の世ごもやらぬ昔ねをり　清富
ほくく日和を引掃ふふる　蕩沢
昔さき花咲あるじの化城ぶ　雪白
老宗なをを宗をふなあ　拾五

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

配役

奠供　地福寺　寛靜
祭文　春日寺　伎應
表白　持佛寺　梵甲
唱禮　万福寺　隆海
唄匿　院主　慈善
散花　藥師寺　吳朝
前讀　藏之坊　惠田
安樂院　賢亮
毘沙門寺　義亮
善福院　伎淨

經頭　隅之坊　智專
後讀　神王寺　觀順
廻向　安樂院　惠光
大福寺　明鏡

右所定如件

維天保十三壬寅歳
八月十有一日

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

宗匠
副匠
執筆
捻香
座見
應容

物室
虛白
磎山
拾五
遠水
杜鷿
杏卉
正木
卧雪
薫溪
政年

津畏
春眠
橋治

一東
双鵝
月石
千艸
金波
梅隣
若阜

芦岸
五橋
魯川

軸物掛り

袈頭

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

補助

會頭

草子
賀園
希声

遠水
求古
鷺秋

なるかうしやうふる紀招の
みのむしれ青蛾勢ま来
霜のおやゆりう生歌の九
時百舎ま似う修ううや秋
嗽しう初名きやや
う鼻あて何嗚く
蓄ふ
神皇ま修ううう
古和れまま
中乃ううれまて

梅室
秀白
一志
杜鵑
砧山
鳳朗
八千房
三昌
卓池
大坂
鶴左
大坂
井右

（イセ山田）
（大ウ）
（イセ）
（永）
（京座）
（イセ）
（白子）
（さハ）
（イも）

国立国会図書館　タイトル『声の栞』 請求記号 863-160
ガラス使用

（江戸）
（永）
（久居）
（来檀塚）
（イセ久居）

棠の香や烟ん（イセ）とうとき　猫年

春風や屏風をはなむかし　（イセ木槿ツカ）巳蓼

赤椿ふりもやらぬ一山

みそのうやふのうしろやまの　度柳（山ニロ和東）

柘そよう尾花名こそ淀さぶし　太茄

小翔やおもうあたりそ（イカ）一之

ちら筈ときはく物語の白びん（イセモクケツカ）波月（山ニロ）

はゆそくく塚さへあやめの香　紫藁

白のおいおなの達けくう吟ふ影　謝年

蓑入やそれおそあるおもそ　姜中

昧風の吹ふりけるや雫のなそ　一啓（山ニロ）

そるう勢や鞭うかふ納のお祢（和良姉）　光石

きそくます宵て後一まん塚の本（イセ久居）　一丘

ふとふはうもなくてそのまゝ（山ニロ）　村山

仕おろ秋く仕羊一の中へふの月　押子

秋の数そ入こう時そあ渡りう　益弓

山ひとり実しろそへてり（山ニロ和東）　宗武

百そ秋そ泊の春の雪の景の永　秋滝

こそれいものそ庭一月の妹（イカ）　孝石

起そうもいくそ変なの角口春（石見）　可松

かくて方々こゝをそゝあの家の雪　京　橘治
底冷をあるふしてそ月えうれ　江戸　篁玉
山ふまと雀くる初もみちうえ　和歌　鯉桃
神垣やまあしたまゝ雪もまゝ　大坂　貞秀
竹〳〵の中よ雪〳〵屋ねうえ　京　花庵
遥おろ生めゝ叶の夢　樗童
猪の子も丸て雪日や　作者　芙山
幾様もおれ〳〵調子やまりくれ　イセ　雙龍
今もおれ夢や牡丹の道祖神　上ノ　柳眠
はゝそ木ゝ葉史雪よ橋の前　ナガリ　猪吹

秋の雲　菊芝
人の帛ふ書ゑる打手も張ふ矣　大坂　東塢
貧庵社雪〳〵床しや虫ゝ声、春風
帆の戸ゝ狗る灯影や参乃玉、松室
草〳〵ゝ家ゝゝ急ゝ香煙ゝ、知童
ゝ風のかゝゝ松く屋花ゝ、紫遥
一ゝに田やうゝ事ゝ牡ゝ中、豊雪
高志ゝれ笑ある帆ふゝゝ九条
ふの道や行人いゝれ秋のゝれ　加賀　千遊
影ゝ沿ゝよ見ゝ行ゝ花のゝ重　雨伏

家陰紅牡を拿弍のむしろ哉　京　孟夏

かくるゝ風情やおもふ桔梗尾花　アキ　青枝

陽月下旬今もの寒ふ哉　ハマシ　花屑

敷ムのあらく〳〵掃やう冬の月　イカ　二文

何事もそれきりの菊の白う哉、　如流

古句の遠忌めぐり　京　斜月

炉をむすぶ夜更て竟牡丹乃雪　十六　其山

猿もおてけぼりくふ秋夕　京　仙安

盂蘭盆はかどしけて月おそし、　如柳

野菜のむしろの旬よ法事、　南徳

年くるゝ塚の芒哉、　汕風

月計事仲の限る鐘つく事、　凡光

声くれむしまでの事、　化蜀

何見てもおろかにあらて煤の凡　近々　芋丈

塚のおもかげ成し秋暑哉、　重枝

まをつけはぬる牛や牡丹の雫、　鳥乙

在かよそ咲く梅乃春哉　イヨ　邪言

いきみよさまく影やや塚の竹　上ノ　若皐

立ちほし遠き社やの虫、　里栢

面影に落ぬ惜乃凡雲窓

仍りはまき葭の峰　南都　金龍
雲もとり一夢人もなし　作州　茶尺
綾おもし丸雪岁月あを、芙山
かきりあき空は月あを　イセ　淇悠
きりけり又汲人まき苔乃糸　ナバリ　折枝
志はしる雨まり春のそき亀　江州　玉脂
志ゝ雪のむりを广の峠北　イガ　玉亭
おまハおふ一流まや秋の水　大坂　草乙
翁忌年思へハ袖も春のわく　雲風
猪ともり袖もまゝ翁の日　工青

なゝひなゝ志ゝなゝあ月の人　十二ハ　負野
住そゝ華もゝゝ虫のゑ　イカ　水龍
通雨半乃新春傳ゝゝ志ゝ　十二ハ　月迺
義もの春ハ学へゝあ雪ひくゑ　イカ　路月
ゝ前を神も雪ゝゝゝ志ゝ　イセクモツ　梅門
釈迦と新之業ゝみゝ白雪　イセ　白雪
若伸ゝて初半ゝくゝ略やゝふ　十二ハ　擽園
若の春ゑさや石七十年　白戸　宜涼
ゝ向ともなれゝ升のこゑれ　白兄　杏角
常盤木の春も光りを招りう新　双亀

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

名月やかさ形うつる水の面　子遷（イセ）
秋雨もふるや菊の葉、士明
海のおと香ハ芭蕉塚　桃友（イセ）
雪の暮のこる白や塚はれ初る　松山（イカ）
ぬしたえて活るふけ寒り哉　静好（イカ）
送れしを分ハ蚊るゝ夜と成ぬ　好月（十二ハ イセ）
砧の後ハ峰うつ月の影のかなしさ　雪岫（イカ）
香の火も有こゝろ哉　奥口
道をくる向ふは田やその花　亀庭
きゝ捨きゝ捨の秋のおの之助　巴山（カハチ）

古池や道のつゝきハ苔の花　三楽
此座をすゝやかさるゝ後時雨　韜甫（イセ）
道端の塚もうれしや木槿　甫山
ふりさくる雪降虫や塚の新　波月（イセ 貞人）
虫時や濁り江戸の草の華　虎尺（大坂）
来ん春のある新酒しるき月　昌風（イセ）
おのれしく葉ハ落つゝや菊の塚　逸虎（筑紫）
積る程雪ハ埋ずに雪の山　柳波（イセ）
稚児七日ハ三つ多き江戸の菜陽
走る季を廻り流水の空、田春

萩咲や雫ともなく雨ふる　大坂　梅童

菊は香や後行をも拒まず　イカ　朗々

時雨るゝと又ふりかゝる　江戸　謙亭

星崎と探や物も峰の月　耳の庵　士好

初風の雫も蚊帳へ吹入て　一石

おもかげ事にてある姫まつ　寿旭

演乃秋初夜の月色海の雪　赤又　李池

雪ふるもあるて鉢叩哉　一竹

風ふく窓も雨て暑さを待ふ　今朝　山甫

朝寒ふるふるも雨ふく　佳堂

みの虫も悲しとなくわが庵　大阪　風竹

山路うき事おてハとを和ぶれ　機堂

いつ一夜まくらぬ月の　十六　貞樹

おさうふや望日のお物を　時雨の亭

雲を也芳尾花袂たむけ草　和カバ　芳吾

笠初て雨ふる〳〵時雨哉　折人

月清〳〵初手汁よれ　イカ　冨暁

苔ふるも茂ましへ葉の陰　雨雅

蘭の香や人を指也ぬる夜　イカ　晨山

見よれい椎のみなあの日　雪風

ひさのうれ吸ふ露ふしを
なみだ来てほこりのたまる秋
蓮かる日をうれしとや見る
夢さそ我宇本万 松甫
稗を苗姉をうゑけるあるじ 虚舟
月のひかりあるかなきの原 野橋
志ろたえをおもひ捨てし 松隣
なれ(ゝ)を佛捨てにけり虫 花水
萩の色蘇鉄笑ひ咲ける 梅井

芭蕉翁百七十遠忌追福

俳諧之連歌

芳野出古葉乃こゝろもとれ松雫

井をなめらくく山茶花の散 春湖
きん掻うめ冬ごもりする 漾山
そゝら寒さを後るのうぐひす 如毛
志ばす月待宵の立ち遅り 琴圭
一ふしなれと遊ふ庵 猪吹
杉利休そゝつほくそふ 斜月
長谷の戸張のそとまく 如出

日こうさ…
…
添削をかねまいまれ…月のもと　市雪
…
…酒の肴俳句を…数年使　女　玉英
…ること…
…の栗は…のたくらみ　女　玉扇
…
…
…

又いつかをりをり　　吹
そまさものさうそ郷の牡をる　　月
等雑もまさへかれいぬきをしまき　　花
流利ふそ色ら陽もふも　　水
彩ふ笠角うさ飯　　秋
おなしかまくの差ふ異股を　　蕾
花弟ろかく銭華　　梅僊
そろのまろさをもむ東風　　石

芭蕉翁る巳十遠忌追福
和及丹波市連
俳諧之連歌
もみ云い唇さまし緑の風　翁
有明おこむ春郭の森　呉陵
きらくと木の実うち散宮中そ　三笠
週そろまぬ誇の栄吟ふ　少年　悟伯
行にもそなおよなまき世の時　桃美
飼乃笠の名おる会てき　五陵
利用く流行物そる二の滝　奇翠
声そ支とそきつそ近はき　等弦

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

井女我事任叔母ゝ　祢め色一　盲多輯

　　窮のそら行きつゝ汲ぬ泉を庵　桃水

時雨連まく楠さ枝路馬及ゝり　少年春兄

　けんそなき我なら千夷嵯峨　帝山

氷ゝて止むる月乃そらの淋一　春岱

きふゝつくる砧あゝく　物雪

旅漬のつゝ夢千さ　雪吟

　きひ後よのそれとたゝう　窓香

如持のき雪和ふそ　執筆

さくいふ年なる妹る

蕪村る七十年忌の法営ゝつゝなる年ゞ

我四つ小にいてそ偲されし雪のそゝろ

を感しおよそ手好うる思ひを伯人とく

　表六章　　石戸竹渓

数さ陶我そくいふ酒まめ一ふゞ

　そ称も晩称しおとやうふ秋

軒ろうき月小新酒の口なけく

　仕つき芽ゝとらて急る我分

なのそものを姫うは馬を乗ゝし

国立国会図書館　タイトル『声の栞』 請求記号 863-160

ガラス使用

いまさらや素ぬ袷のつくろひ

追善俳諧連歌

桜狩糸油大堤社

そのもゝの青残ゆる夏木立　社

かさね初の油灯を月や暮るらん　退歩

車の水銭ゆさ〳〵と　一東

市むしの巌を篭と探入て　先橋

午時酔そ雀の森おゆさ比　曲阜

表八章

安法津社中

きりぎりすのはる彼うの蓑の妻　支考

悲ひかきんさめるむ井の水　如栗

おし合茂如ける月白の蚋りく　栗

紫西さ成しゝ風のやうらさ　〃

こもろ川等をうあ千さも　〃

大さそいても見いる事よ　栗

月影さ行のようさる躍めろ　〃

入色の沼のはとふやさ　考

芭蕉翁百七十遠忌追福

俳諧之連歌表六章　江戸小川　長高坊

行き地之塔や志ぐれ行　未申

沉竜も吟ぬ人も来ぬ川

都うく〳〵と松のあるこそおもしろき

なり主釜ふり水をさしうり

もの〳〵影うひ〳〵しへぬ月の空

のきいろ〳〵安の上ゟ

芭蕉翁追善俳諧之連歌

江戸野川連　喜水

移ろふ人捨へし跡の垂木哉

捨しうちいふ事ゟ野の

雷の怪我月ゟ若牧

七夕て雨乃ふる白水砂泡　水

ものゝ市を寺ゟ賣なるう　笠

放て近寄る夜犬の声　枝

芭蕉翁追福俳諧連歌

河津社中

一折

みのもりの寺にて来よる客の庭前

月ありと我のうみとる寒　雲石

汗乾く妹の末弟の鼾かな　菜園

梅ちりて昼こそ寒き屋敷かな　桂外

春と言ふもうらいやさう柿もこぶ　玉圭

ふるく〳〵ふる亀鉢と水仙と　雪如

曙笠内二摩ふもちる梅比次海　鼓松

ふり巨燵よくもる〳〵永きし　梅吸

鉢を打れとおきりよせいく筵の雪　不山

大和めぐりの道ちらむ悉　圜

[illegal]ん[illegal]のあと酔ひきしめの七事哉　石

醤油の壺のゆるしかなの乱れ雪　圭

暑ちゝもち[illegal]ありなりくる月　外

錬迹〳〵泥辞[illegal]る小[illegal]　松

そこら市人の門葉我飲ちゝ　岫

今秋我なら参おて氣　山

枝ちりく花の末添きし　吸

ちる咳き〳〵未稔せ梦をぬく　照映

多向能浦亜多一折

洞津梅榊社中

我が里をさして帰る秋の雁　巴丈

りんごの葉ふちの赤き　巴丈

月ちと木枝の小家をかわ交ぐ　梅暁

枝も葉も霞もやうやう薄緑　初菜

春ほとゝぎす裏の藤の一しく　春憩

夏ふく風衣ありて涼しき　香暁

新茶こそ料理今　如流

行そのゝきいせまん春　丈華

兄弟のちぐはぐ花をいとそろく　丈

帰てから急ぎ止さきば　暁

秋汲てすゝまるおりる　峰茶や　葉

年〳〵櫂の生そふ吟きく　憩

もるゝもふかゝとおしき月の窓　暁

雨戸掃ふて残く移る風　流

置ふみ略して参しおとし　華

大八をこうばしく上る　葉

志こやこる日和かさまがる花ぢくあ　暁

考ぬ帰ぬけて几巾ふ洗　憩

芭蕉翁ゐ十遠忌

俳諧連歌

伊賀上野連

咲うへてもてなせうめの花木槿　其容

　庵ゝ居なからめいの竈魚喰ふ　物望

盃の光りおそろくいさゝよこ雫　千章

　結白ゆきうて竹の割下駄　そよ石

山羊の隣いを通きた車井戸　桃渓

　奥へ動かそうよ鯉　柳　容

高野いの雷ひもまうせおき　石

　茶きらひな娘りちろめ　章

うれまて夕ゝ拍子押込き　容

きりきりときぬ〻るの泣　渓

せんとんの立合ひ書物箱　章

鞠球きゝり出入浪人　石

广嘗て乞きもちとうる自　渓

たらいの水を夫寺秋風　容

言きゝ立ゝうゝの姉いたいく　石

ちゝうきう拵上る斧　章

そろなく花ゝ魚たる年の鞍　容

行云やら姉しゝ夫の暖　渓

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

芭蕉翁百七十遠忌追福

俳諧連歌　　狸花月姥舎興行

冴る気や学や吊ふ中ふ月あれ雁　貞哉
うそうそ神を七歩七歩月　貞野
大江戸たりと言のくち葬そ　貞蘿
雪清のにて此雁をつめる　芦郷
そそ立のまよよのひひる椋の先　巴童
ひらきまうて八撓子考葉　貞菊
特よ風の皿へたまうー　貞峯
たくねくつく福系のそ　哉

おのよう辻洞ううぬ男たしなそ　野
七月我石ろ双六をうり　貞雪
月ぶる蘇よ此諸を延ふ　郷
そ梅の点此凍る祢ら塀　蘿
まれなそ投去堪ふ点を雪　貞蒲
化病まそも迎ー宛寿寺　野
甲子ふ庚申待の盛うー　郷
石斗りちる(ふ)の階椿　童
咲ふより蒼の多いつまれ花　峯
蓬煙竹もも此味ひ　郷

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用

公家下い雑のうち入　野橋
　警け毛うの鞍をたうる　蒲
糸筋け月利う湯を雫起る　哉
　燈の垢をうし月の汗　卿
人強のう杉（こ痩を向ひ　巴山
　流の絶作物う　峯
窓をぶうまうたまうる陸る銭　負低
　者来鞍のいさせ南風元　野
画図てうこうまうはもぶ小松京　蒜
　殊気こ年九うのなうの古を　巴山

名うの明やの球こなまれなあ　蒲
　銭金銭さうを未至町の秋　橋
主人の連銭いやう　お楼元　童
　こ作重まりこうをむ垣幸　山
やうく〳〵と御御い物り成こ利　御
　面うあれさまこうをう元　菊
こうこう面新こうへうこうの花ぢう　低
　出打雨乃屋きこうの雫　執筆

蒲尾

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石田文庫

笠の戸を叩て留主と云ふ　路青
奥の眼社なるさくらかな　巴律
余の風のまゝらの蕨の日裏く角　奇流
ものく果小妹をこなわ粘尾を　未墨
等も枝とる　四　鄙竹庵　苔翁
森そろ社矣そもそも　春痴
床矣手で四面もんだ　右文
吐るしく訛の琴しや乃月　又考
さうくをやそらそら紅　粘朱
そうの等れ舞ふ四面ふ　可慶

四毛蕃の東毒も出て鳴るとり　香岡
死とりてはく漬ま月あの桜ふ　美義
前蛭ふる世目の雫ふらうふ　蛙方

863
160

古郷連普之

14255

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『声の栞』　請求記号 863-160
ガラス使用